大日本耳鼻咽喉科會會報

第三十八卷 第八號

昭和七年十一月

原 著

初生兒ニ於ケル鼻中隔彎曲症検査

Shinji Yoshida: Untersuchung der Deviation septi nasi bei Neugeborenen und Säuglingen.

吉 田 申 次

鼻中隔彎曲症ハ成人ニ多ク見ラレ、ツツケルカンドルハ七歳前ノ小兒ニハ全ク無シト論ジテキル。然シ之ハ果シテ事實デアラウカ、疑ナキヲ得ナイ所デアル。翻ツテ文献ヲ按ズルニ、哺乳兒ノ鼻中隔彎曲症検査ヲ行ツタモノ極メテ少ク、本邦ニ於テハ余ノ寡聞ノ致ス所、未ダソノ報告ヲ耳ニシナイ。

余ハサキニ恩師久保教授ノ命ヲ受ケ、昭和七年五月八日ヨリ同月十四日迄七日間、九大小兒科教室デ開催サレタ福日主催赤ン坊會ニ於テ、哺乳兒ノ鼻中隔彎曲症ニツキ検査スルコトヲ得、コハ、一ツノ成績ヲ報告スル。

検査ニハ久保教授型小兒用鼻鏡並ニワイルト氏耳漏斗ヲ用ヒタ。

検査人員ハ一歳ヨリ七歳迄ノ小兒一八〇六名、内男一〇〇八名、女七九八名デ、検査成績ハ第一表ニ示ス通りデアル。今之ヲ年齡別ニ分ツニ第二表ニ見ル如ク、一歳ヨリ三歳迄ノ平均率ハ、男兒デハ右側ニ向ウモノ四・一一%、左側二・一六%、計六・二七%、女兒デハ右側二・六〇%、左側一・九二%、計四・五二%デアル。

成書ヲヒモドクニ、鼻中隔彎曲症ハ小兒、特ニ哺乳兒ニハ全ク無イモノトサレ、彼ノツツケルカンドルハ本症ノ成因ヲ論ジテ生理的、外傷的、並ニ代償的病因說ヲタテ、『鼻中隔彎曲症ハ七歳前ニハ無ク、第二齒牙發生期後ニ來ルモノナリ』ト結論シテキル。然ル後、彼ハ四乃至六歳ノ小兒ノ頭蓋骨三十五個ニツキ検査シタ結果、明カニ鼻中隔ノ彎曲並ニ梯形成アルノヲ認メ、最初ノ說ヲ改メテ『多クノ場合ニ於テ然リ』

表 一 第

検査總人員	鼻 中 隔 彎 曲 症		合 計
	右 側	左 側	
男 性	四五 四・四六%	三〇 二・九八%	七五 七・四四
女 性	二五 三・一三	二〇 二・五一	四五 五・六三
合 計	七〇 三・八八	五〇 二・七七	一二〇 六・六四

性 別	年 齡	檢 査 人 員	鼻 中 隔 彎 曲 症		合 計
			右 側	左 側	
男	一	二〇八	七 三・三七%	三 一・四四%	一〇 四・八一
	二	六一六	二九 四・七一	一五 二・四四	四四 七・一五
	三	一〇一	二 一・九八	二 一・九八	四 三・九六
	計	九二五	三八 四・一一	二〇 二・一六	五八 六・二七
	四	四二	二	二	四
	五	二〇	一	四	五
	六	一五	二	四	六
女	七	六	二	〇	二
	一	一八七	三 一・六〇	三 一・六〇	六 三・二一
	二	四五六	一〇 二・一九	九 一・九七	一九 四・一七
	三	八七	六 六・八一	二 二・二七	八 九・〇八
	計	七三〇	一九 二・六〇	一四 一・九二	三三 四・五二
	四	四二	二	二	四
	五	二〇	一	四	五

性 別	年 齡	檢 査 人 員	鼻 中 隔 彎 曲 症		合 計
			右 側	左 側	
男	一	二〇八	七 三・三七%	三 一・四四%	一〇 四・八一
	二	六一六	二九 四・七一	一五 二・四四	四四 七・一五
	三	一〇一	二 一・九八	二 一・九八	四 三・九六
	計	九二五	三八 四・一一	二〇 二・一六	五八 六・二七
	四	四二	二	二	四
	五	二〇	一	四	五
	六	一五	二	四	六
女	七	六	二	〇	二
	一	一八七	三 一・六〇	三 一・六〇	六 三・二一
	二	四五六	一〇 二・一九	九 一・九七	一九 四・一七
	三	八七	六 六・八一	二 二・二七	八 九・〇八
	計	七三〇	一九 二・六〇	一四 一・九二	三三 四・五二
	四	四二	二	二	四
	五	二〇	一	四	五

ト追加シタ。今文献ヲ涉獵スルニ、本邦ニ於テハ哺乳兒ノ鼻中隔異型ニツキ研究シタモノ未ダ無イヤウデアル。ウエルケルハ四乃至五歳ノ小兒ニ彎曲症ヲ見、アントンハ生後六時間乃至四十日ノ初生兒五十六名ヲ検査シテ九例ノ彎曲症或ハ棉ヲ發見シ、バトルツツクモ初生兒ニ鼻中隔非對稱アルコトヲ報ジテキル。又ベルジアハ腐蝕シタ初生兒頭蓋骨標本ニ著明ナ彎曲症ヲ證明シ、ヒルシュハ一ヶ月半乃至三ヶ月ノ胎兒ニ於テ、明カニ鼻中隔ノ非對稱ヲ認メタト述ベテキル。

要スルニ余ノ検査成績ニ於テ明カナ如ク哺乳兒ニ於テモ鼻中隔彎曲症ノ存在スルコトハ、動カス可ラザル事實デアル。

其百分率ハ、余ノ検査デハ一歳ヨリ三歳迄ノモノ男九二五名、女七三〇名、計一六五五名中、彎曲症ハ男五八名、女三三名、計九一名、即チ五・五〇%トナル。

從來報告サレタ成人ニ於ケル彎曲症統計ハ第三表ニ示シテアルガ如ク、平均約七九・三%デアルガ、之ト比較スルニ、哺乳兒ニ於ケル頻度ハ成人ノソレニ比シ約

表

性				
七	六	五	四	
一	九	二六	三二	
〇	一	三	二	
一	一	一	三	
一	二	四	五	

十五分ノ一トナル。
男女性別ニ分ツテ見ルト、男兒六・二七
%、女兒四・五二%デ、男兒ハ女兒ヨリ
モ多イコトニナル。今成人ノ性別ニ關ス
ル諸家ノ統計ヲ示スト、

第

三

表

氏名	検査總數	鼻中隔彎曲總數	同%	S形	混合	C形	右側	左側
Mackenzie	頭蓋 二二五二	一六五七	七六・九	二〇五	五〇		六〇九	八三八
Zuckerkanll	頭蓋 三七〇	一四〇	三七・八	三二			五七	五一
Süer	頭蓋 一七二	一一二	六五・一	九			五〇	五三
Jurasz	二二九	一九三	八四・二			一六四	八八	七六
Heymann	二五〇	二四一	九六・四					
Seelzink	二〇〇	一〇七	八三・五				六二	四五
Selender			七九・六					
Szinnowski	九七四	九二五	九四・九	一七			一九一	一八八
Thiele			七五・〇					
窪田			八一・四					
菅野			九七・三					
平均			七九・三					

ユーラン 男性 六八・四% 女性 三一・六%
スチール 男性 七九・〇% 女性 二八・〇%
デアル。

原著 吉田||初生兒ニ於ケル鼻中隔彎曲症検査

余ノ統計デハ一歳乃至三歳ノ哺乳兒デ、鼻中隔彎曲症ヲ有スルモノ九一名中、男性五八名、即チ約六四%、女性三三名、即チ約三六%デアツテ、ユーラン並ニスチールノ統計トホマ一致シ、男性ニ多イコトヲ示シテキル。検査人員ニ對スル百分率ハ、窪田ハ男性八三・八%、女性七八・三%ト述ベテキルガ、余ノ検査ニヨレバ男性六・二七%、女性四・五二%デ、百分率ハ少イガ、ヤハリ男性ガ女性ヨリ少シク多イガ、著シイ差ハナイ。

彎曲症ハ凡テC形デ、S形或ハ棘刺等ヲ認メナカッタ。而シテソノ向フ方向ハ一、二、三歳ノ各年齢ニ於テモ、男女兩性ニ於テモ、常ニ右側ニ向フモノガ多イ。

年齢ハ凡テ數ヘ年ヲ用ヒタガ、彎曲症ヲ認メタ例デ最モ幼少デアツタノハ、生後三十五日ノ男子デアツタ。

尙ホ分娩ニツキ調査シタガ、一般ニ分娩ハ容易デアツテ、唯ダ左側彎曲症ヲ持ツテキタ生後二ヶ月ノ男兒ノ一例ニ於テ、比較的分娩困難デアツタノミデアアル。(但シ錯子娩出ニハ非ズ)

鼻中隔畸形ノ成因ニ就イテハ既ニ述ベタ如ク、ツツケルカンドルノ代償的、外傷的並ニ生理的病因説ガアツテ、鼻中隔彎曲症ハ凡テ後天的ノモノトサレテキル。然シ、ヒルシュハ一ヶ月半ノ胎兒ニ於テ、未ダ中央前額突起ガ上顎突起ト癒合シナイ前、即チ鼻中隔ガソノ發育上何等ノ障礙ヲ受ケナイ前ニ、既ニ非對稱ノ現ハルコトヲ證明シ、余モ亦本検査ニヨリ、哺乳兒ニ於テモ少數デハアルガ、確ニ鼻中隔彎曲症ノアルコトヲ知ツタ。即チ鼻中隔非對稱ハソノ大部分ガ後天的ノモノデハアルガ、胎生期ニ既ニ存在スルモノモアルト信ズル。

以上ヲ要約シ、

一、哺乳兒ニモ鼻中隔彎曲症存在シ、ソノ頻度ハ約五・五%デアアル。

二、女性ヨリモ男性ニ、又左側ノモノヨリ右側ノモノガ多イ。

三、鼻中隔彎曲症ハ胎生期ニモ存在スルデアラウ。

ト結論スルコトガ出來ル。

終リニ臨ミ、恩師久保教授ニ滿腔ノ感謝ヲ捧ゲ、又検査時特ニ便宜ヲハカツテ下サツタ九大小兒科教室員各位並ニ福日社各位ニ謝意ヲ表ス。

Literatur.

- 1) Anton, W.: Arch. Chirheilk. Bd. 35, 1893, zit. in Heymanns Handb. 2) Herzog: zit. in Hirsch, O. 3) Denker, A. u. Kahler,

O.: Hambl. d. Hals usw. Heftk. Bd. 11, Luftwege u. Mundhöhle, s. 444, 1926. 4) **Steynmann, P.:** Hambl. d. Laryngologie u. Rhinologie Bd. 111-1, s. 440, 1900. 5) **Hirsch, O.:** Mon. Ohrenheilk. Bd. 59, s. 1057, 1925. 6) **Juruzzi:** zit. nach Kubo. 7) **Kubo, Ino:** 久保猪之吉. 鼻科學, 第2卷, 三九七頁, 1910. 8) **Kubota, Sh.:** 窪田圭一. (會) 耳鼻咽喉科, 2卷, 12號, 1122頁, 1926. 9) **Petrzsek:** Mon. Ohrenheilk. 1890, zit. in Heymanns Hambl. 10) **Sugano, M.:** 菅野正雄. (會) 大日本耳鼻喉科, 29卷, 1號, 122頁, 1923. 11) **Wetcker, H.:** zit. in Heymanns Hambl. 12) **Zuckerkandi:** Normale u. pathologische Anatomie d. Nasenhöhle u. ihrer pneumatischen Anhänge, s. 92, 1882, zit. in Denker u. Kahlers Hambl.

(原稿到着昭和七・八・二四)